表情知覚の「根源性」をめぐって
——カッシーラ，メルロ＝ポンティの表情論から——

森田　亜紀
倉敷芸術科学大学芸術学部

（1999年９月30日　受理）

はじめに

本論は，芸術体験において「表情の知覚」が大きな役割を果たしているのではないかという見通しの下に，表情という角度から表現を考えていこうとする試みの第一歩である。英語やフランス語のexpressionやドイツ語のAusdruckが，表現と表情を共に意味しうる語であることからも，表現を表情と関係づけて考えていくことは許されると思われる。

本論でいう表情とは，狭い意味での表情，すなわち人の顔の表情にとどまるものではない。たとえば，次のような描写は，ひとが自然や風景のなかにも一種の表情を見て取っていることを示している。

（…）日は青々とした空に低く漂って，射す影も蒼さめて冷ややかになり，照るとはなくて只ジミな水色のぼかしを見るやうに四方に充ちわたッた。日没にはまだ半時間も有らうに，モウゆうやけがほの赤く天末を染めだした。黄ろくからびた刈科をわたッて烈しく吹付ける野分に催されて，そりかへッた細かな落ち葉があわたゞしく起き上がり，林に沿ふた往来を横切って，自分の側を駈け通ッた，のらに向いて壁のやうにたつ林の一面はざわざわざわつき，細末の玉の屑を散らしたやうに，煌めきはしないが，ちらついてゐた，（…）[1]

「青々とした」空，「蒼さめて冷ややかな」影，「あわたゞしく起き上がる」落ち葉，「ざわざわざわつく」林…。ここでは，人以外のものも，表情をもっている。このような表現に特に違和感が感じられないとすれば，表情を，われわれが日常出会うすべてのものの表情にまでひろげて考えることが可能であろう。

カッシーラやメルロ＝ポンティは，知覚の現象学的研究の中で，このような広い意味での表情を問題にする。表情の知覚や表情は，彼らの哲学において重要な位置を占め，表現の問題ともつなげられる。われわれは，彼らの考察をたどりながら，表情がどのような意味で問題とされるのか，表情において何が問題か，整理し，考えていきたい。

1．カッシーラのAusdruck

1－1

カッシーラはその主著『シンボル形式の哲学』第三巻「認識の現象学」において，知覚の根源に表情体験Ausdruckserlebenを見出し，そこにすでに，世界を或る形式（シンボル形式）のもとに把握する「シンボル機能」がはたらいていることを確認する。カッシーラにとって表情はまず，感性的知覚が単なる受容ではなく積極的な形態化Gestaltungであることの証である。

カッシーラは，カントが感性的知覚の世界を特有の規定と分節をもつ一つの構造体と理解し，超越論的統覚を考えたことを評価する。その意味でカッシーラの問題意識はカントの超越論的哲学をひきつぐものである。しかしカッシーラはカントの超越論的統覚が自然科学の理論的世界像を前提としたものであることを批判する。概念による科学的で精密な世界把握とは異なる様々な世界理解があり，それに対応してさまざまなシンボル機能，さまざまなシンボル形式があるという批判である。カッシーラは，知覚における形態化・形式が，科学的認識の形式とは異なる，より根源的なものであることを明らかにするために，表情知覚に注目する。

表情は，カッシーラにおいて，客観的質の機械的受容でもなく理論的世界把握でもない世界了解のはじまり，意味をもった世界が成立してくるそもそもの基盤として重要なのである。

1－2

カッシーラの論は，表情知覚の基本的特性を押さえたものであり，われわれが表情を考える際の出発点となりうる。その内容を，もう少し詳しく見ていこう。カッシーラは様々な角度から表情体験の根源性を主張する。

知覚は，感性的質，感覚与件（センスデータ）の単なる総和には解消されず，つねにすでにそれを越えた或る表情を捉えている。Was（何か）についての知覚だけではなく，それとは別に，「魅惑的Lockenden」「威嚇的Drohenden」「なじみ深いVertrauten」「不気味なUnheimlichen」「心なごませるBesänftigenden」「恐怖を起こさせるFurchterregenden」といった表情性格Ausdruckscharakterenの直接体験がある[2]。カッシーラはゲシュタルト心理学の知見を踏え，表情が感官的諸要素に還元されない，それ自身として体験されるものであることを強調する。

表情体験は，物とその属性という分節をとらない。表情による理解（Verstehen von Ausdruck）は，事物についての知（Wissenn von Dingen）に先行する。カッシーラは，生後数か月の乳児が母親の顔の表情Gesichtsausdrucksに敏感に反応する例を挙げる一方[3]，神話的世界像に見て取られる「変容Metamorphose」，自己同一性の法則に従わない存在様態の流動性を，純粋な表情体験に基づける[4]。表情体験において，現実としてまずそこにある

のは，実体的な事物の総体ではなく，「相貌的な physionomish」性格の多様な豊かさである[5]。

かといって表情は，決して「主観的なもの」ではない。客観的な感覚の内容に，主観の側から類推や感情移入によって二次的に付け加えられたものではない。表情性格は付加的なものであるどころか知覚の本質的構成分に属す。表情知覚においてわれわれの被る「生きいきとした働きかけ lebendige Wirksamkeit」の確かさが，知覚に実在性 Realität や現実性 Wirklichkeit を与えるのである[6]。さらに，働きかけを被っているということ，すなわち表情知覚のうちにあるこうした受容性 Rezeptivität は，自己意識を特徴づける自発性 Spontaneität と対立する[7]。こうしてカッシーラは，表情を主観から出発して説明する旧来の類推説や感情移入説を却ける。

以上のようにカッシーラは，表情が，どのような実体にも還元されない，それ自身根源的な「現象」であり「現われ Ersheinen」であることをさまざまに論じていく。表情知覚は，事物にしろ人称にしろ，（いわゆる客観の側にも主観の側にも）特定の個別的存在者，特定の基体 Substrat を必要としない，前提としないのである[8]。

1－3

ところでカッシーラは，特定の基体を必要としないという表情知覚のこの特徴に，表情知覚がもつ「非人称性」，表情知覚のうちに現われる「普遍的な性格」を結びつけて考えている。

> （…）表情知覚において根源的に「現われてくる ersheinen」のは，現実の或る普遍的な性格であって，特定の個別的存在者がここにこうしてあること Dasein und So-sein ではない。表情知覚は，その多様さと生きいきしていることのうちにも，なお「非人称的であること」という性格を保持しつづけている。表情知覚は，いつでもどこでも告知すること Kundgebe であるが，まさにそれゆえにこそ，そのための特定の基体を必要とすることなく，告知するという現象そのもののうちにとどまりつづける。[9]

カッシーラは，「表情意味 Ausdruckssinn（あるいは表情－意味 Ausdrucks-Sinn）」という語も使っている。表情は，個別的なもの・特殊的なものを越えた普遍的なものの領域，したがって意味の領域に足を踏み入れているということであろう。であるからこそ，カッシーラにとって表情知覚は，シンボル機能のはじまりとして重要なのである。カッシーラはそもそも「シンボル」という概念を次のように定義している。

> われわれがシンボル概念によって包み込もうとしたのは，以下のような現象の全体である。すなわち，いかなる種類のものであれ，一般に感性的なもの Sinnlichen の「意味充

実」がみられるような現象，つまり，或る感性的なものが，それがここにこうしてあること Dasein und So-sein のあり方のうちに，一つの意味の特殊化や具体化としても，顕現や受肉としても，同時に現われてくるような現象の全体である。[10]

「二つの契機」という言い方をカッシーラはする[11]。シンボルは，「感性的なもの」と「意味」との二つの契機をもつ。それ自身，根源的なものとみなされる表情も例外ではない。

カッシーラは一方で，表情－意味が，知覚そのものうちに貼り付いており，知覚のうちで直接体験されることを強調する[12]。表情においては，感性的な現われ・見えと別に意味があるわけではない。現象の背後に本質や実体があるとか，「単なる感性的なもの」に意味が付与されたとかいう具合にはなっていないのだ。二つの契機をもつシンボルであるとはいえ，表情は「像 Bild」と「事象 Sache」，「記号 Zeichen」と「記号によって表示されるもの Bezeichneten」というような区別を知らない。

表情においては，「単に感性的な」存在でしかない現われと，この現われが間接に表わしている，この現われとは異なる精神的・心的内実との分離はまったくない。(…) ここには核心も外皮もない。「一次的なもの」と「二次的なもの」の区別も，「一方」と「他方」の区別もない。[13]

表情知覚において，「感性的なもの」と「意味」は区別されない。カッシーラの表情論はその点を強調する。表情において，「感性的なもの」と「意味」は一体である。しかし逆からいえば，根源的なものである表情は，最初からすでに「感性的なもの」と「意味」という「二つの契機」をはらんでいるということにもなる。カッシーラはこのあたりの状況に，「潜勢 Potenz」ということばを使っている。「二つの契機」の「二重性」は，意識のどのような初源的な現われにも備わっているが，表情知覚においてはいまだ現勢化されず，潜勢状態にとどまっている，というのである[14]。

感性的－精神的意識の諸々の形態化のはたらき Gestaltungen をどれほど下降していっても，われわれは決して，一切の分離や区別に先だって，まったく対立を欠いたもの，絶対的に単一なものとしての意識に出会うことはない。それは常に，自らのうちで自ら分化していく一つの生きいきしたもの，「それ自体において差異化されている」として現われる。しかしこのような差異はありはしても，それはやはりそのようなものとしては措定されていない。[15]

潜勢する二重性，いまだ措定されていない差異，「内的対立にもかかわらず一つの具体

的な単一体であったもの」[16]――このようなカッシーラのすっきりしない言い回しは，表情における「感性的なもの」と「意味」との関係の微妙さを示すものといえよう。それはそのまま，もう一つのAusdruck，表現における「感性的なもの」と「意味」との関係の微妙さにつながると思われる。

カッシーラは表情Ausdruck機能につづき，言語における表示Darstellung機能，さらに科学的認識における表意Bedeutung機能を考える[17]。シンボル機能は，表示，表意とすすむにつれて，世界を対象化，客観化していく。物とその属性という分節，実在と単なる現われ，「物的なもの」と「心的なもの」などの区別は，その結果生じるということになるが，それらの基礎にはあくまで表情があるとされる。

2．メルロ＝ポンティのphysionomieとexpression

2－1

メルロ＝ポンティが表情を問題にするのは，ゲシュタルト心理学によって見出だされたゲシュタルトが，知的意識に対してではなく，知覚体験に対してあることを論じる文脈である。ゲシュタルトは知的意味significationではなく，表情physionomieである[18]。例えば円のゲシュタルトは，一点から等距離にある点の集合といった数学的法則ではなく，知覚される円の表情である[19]。メルロ＝ポンティは，ゲシュタルト心理学を援用しつつ，物理的刺激や感覚与件という要素から出発して機械論的あるいは経験論的に知覚や行動を説明する立場を批判する一方，科学的，論理的な知的意識が捉える世界像を前提として超越論的意識による世界の構成を考えるカントの立場をも批判する。ゲシュタルトが根源的なものであり，しかも客観的，即自的なものではなく意識に対してあるとしても，それは知的意識に対してではなく，知覚体験に対してである――この主張は，カント批判，メルロ＝ポンティのことばでいえば「主知主義」批判として意味をもつ。メルロ＝ポンティの知覚体験への還帰，表情への着目はこの点において，カッシーラの問題構成をひきつぐものだといえるだろう。

> 理論的，定立的思惟の「意味付与作用actes de signification」（Bedeutungsgebende Akten）の前に「表情体験expériences expressives」（Ausdruckserlebniss）を，記号による意味sens signifié（Zeichen–Sinn）の前に表情的意味sens expressif（Ausdrucks–Sinn）を（…）認めなければならない。[20]

『知覚の現象学』にみられるこの一文は，メルロ＝ポンティに対するカッシーラの直接的影響と，共有する問題意識を示している。

2－2

さて，カッシーラにとって表情機能は精神の機能の一つであり，世界を形態化するのはたとえ表情のレベルにおいても精神であったが，前期のメルロ＝ポンティにおいては，周知の通り，身体が根源的レベルの主体とみなされる。『知覚の現象学』では，表情も知覚し行動する身体との関係で考察されていく。

メルロ＝ポンティにおいて知覚は，知覚する身体が知覚されるものと共感し同調する，「共存 coexistence」[21]，「共生 communion」[22]と理解される。表情は，個々の感覚器官のレベルではなく，知的意識のレベルでもなく，世界へ向かう身体がその全体的構えにおいて捉えるものである。

例えば，赤や青や黄色といった色の知覚には，各々，身体の或る全体的な反応が伴う。色は，身体の或る態度や構えのうちで知覚される。色は，それとしてはっきり見られる前に，緑が安らぎを与える reposant というように，「運動的表情 physionomie motrice」[23]として身体的に体験される。

物は，諸々の感覚・運動機能の「共働的全体 ensemble synergique」[24]としての身体の，相関者とされる。世界へ向かう主体としての身体の統一性は，諸感覚の相互感覚的な内的交流を基礎づけるが，それは同時に，物の相互感覚的統一（感覚的諸特性が，互いに関係をもちながら全体として一つの物をなりたたせているということ）を基礎づけることでもある。主体の身体において，いわば共通感覚的に捉えられる「受肉した意味」が，物の表情ということになる。

> （…）灰皿の意味（少なくとも，知覚において与えられるような，全体的・個体的意味）は（…）悟性にしか近づけないような灰皿の理念ではない。灰皿の意味は，灰皿に生気を与え，明証的に灰皿に受肉している。（…）他者より先に，物があの表情（expression＝表現）の奇蹟を実現する。すなわち，外部へ向けて明らかになってくる内部，世界の中へ降りてきてそこに実在し始め，まなざしでその場所に探し求めることによってしか十分に理解できない意味，そういう表情（expression＝表現）の奇蹟である。[25]

具体的な例を出せば，ブラシの表情は「現われの下に受肉した，硬くてちくちくする存在 l'être rigide et piquant」[26]と記述されている。

メルロ＝ポンティにおいて表情の知覚は，そのまま表現行為とつながってる。すなわち表情が，世界へ向かう身体の全体的構えにおいて捉えられるものであれば，その身体的構えは，それ自身，自らの知覚するものを，表情として表現することになる。そしてその表情は，また，知覚する自分自身の状態の表現でもある。メルロ＝ポンティにおいても，カッシーラ同様，表情は主観－客観の区別を超えたものと理解される。あるいは，主観的なものの表現であると同時に，客観的なものの表現であることにもなる。あらゆる表現行為は原理上，知覚における身体的構えの増幅とされ[27]，真正な表現はあくまで，まず表情

として体験されるべきものとなる。

2－3

「観念 idée と実在 existence との見分けがたい結合」[28]，「受肉した意味 sens incarné」[29]，「或る本質の顕現」[30]——メルロ＝ポンティもカッシーラ同様，表情における二つの契機の一体性を強調する。その一方で，例えば「感じられるもの le sensible は運動的かつ生命的意味をもつ」[31]，青の感覚が「それ自身を越えて，めざし，意味する」[32]とか，「外部へ向けて明らかになってくる内部」「世界の中へ降りてきてそこに実在し始める意味」[33]という記述に見て取られるように，これもやはりカッシーラ同様，それが二つの契機をもつことを認めている。

この二つの契機の問題は，表現における表情の問題として考察される。メルロ＝ポンティにとって，真正な表現は，表情として，すなわち意味が感性的なものと不可分に体験されるはずのものである。メルロ＝ポンティは，意味的なものを「表現されるもの exprimé」と呼び，感性的なもの，事物的なものを「表現 expression」と呼んで，両者の関係を，「実現する réaliser」という語を用いて考えている。例えば，身体は主体の実存，すなわち主体が世界へ向かうそのあり方を表現するが，それは身体が実存を「実現し」，その「現実態 actualité」となっているからである[34]。音楽や絵画の意味はその音や色と不可分であり，それを実際に見たり聞いたりする体験を通じてしか手に入らないが，それは，表現が，すでにある意味の翻訳ではなく，意味を「実現し」「実行し effectuer」ているということに他ならない[35]。

「表現されるものは表現と別には存在 exister しない」[36]，「着想 conception は制作 exécution（＝実行）に先立ちえない」[37]——réaliser という語は，一方で表現されるものの表現への依存を強調する。しかし他方で，表現が，表現されるものを，réel にすべきいまだ réel ではない何か（？）として前提することをも示している。exiseter，実在するという語も同様に，表現されるものの exister とは別の存在の仕方（？）を暗示する。表現は表現されるものを前提とするように見える。

メルロ＝ポンティは réaliser という語で，表現と表現されるものとの，どちらが元ともいえない相互依存関係を理解しようとしていたと考えられる。表現は表現されるものの表現であるが，表現されるものは表現によってはじめて完成され，現実態となる。メルロ＝ポンティは二つの項のあいだのこのような「二重の意味＝方向をもった関係 rapport à double sens」を，フッサールの語を借りて「基礎づけ Fundierung」と呼び，以下のように記している。

基礎づける項（略）は，基礎づけられるものが基礎づけるものの一つの確定化，一つの明確化として与えられるという意味においては第一のものであり，このことからして，

基礎づけるものは基礎づけられるものに解消されえないことになるのだが，しかし，基礎づけられるものを通してこそ基礎づけるものが現われるがゆえに，基礎づけるものは経験主義的な意味においては第一のものではなく，基礎づけられるものは基礎づけられるものから単に派生したものではない。[38]

この謎めいたFundierungの問題は，現象的身体を一種の超越論的主体とする『知覚の現象学』の枠組のなかではこれ以上追求されない。この問題をのちに別の角度から取り上げているように思われるのが，コレージュ・ド・フランスの就任講演「哲学を讃えて」中で行なわれる，ベルグソンの「真なるものの遡行運動 le mouvement rétrograde du vrai」という概念への言及である。

「真なるものの遡行運動」とは，元来ベルグソンにおいては，或る特定の日時にはじめて成立した真なる判断が，真理は永遠であるという思いによって時間を遡り，判断の定式化以前にも権利上存在していたとされる錯覚，批判すべき回顧的錯覚であった[39]。しかしメルロ＝ポンティは，真なるものについての経験が，それに先立つ時間のうちに自らを投射するというこの現象を，取り上げながらも批判はせず，むしろ真なるものが時間を遡っていくことそのものを真理の根源的特性とみなして，それを積極的なかたちで考えようとする。

私が感じられる世界について言うことがらは，感じられる世界の中にはないが，しかしそれは，感じられる世界が言わんと欲していることを言う，ということ以外の意味をもたない。表現は自分自身を前日に遡らせ，存在が表現に向かって進んでいたということを前提として仮定する。[40]

「真なるものの遡行運動」は，表現と表現されるものとの関係を，réaliserとは逆の方向から問題にするものである。réaliserが，表現の主体（身体としての主体，主体としての身体）を含む表現するものの側，感性的なものの側に視点をおいて，それが「(何かを）現実化する」ということであるのに対し，「真なるものの遡行運動」は表現されたものの側，意味的なものの側に視点をおき，それが「時間を遡る」というのである。

réaliserにしろ，「真なるものの遡行運動」にしろ，表現されるものの「ある」ということが問題となってくるはずである。表現と表現されるものとの関係，表現＝表情における二つの契機の関係は，カッシーラのいうような「潜勢する二重性」を超えて，存在と表現（＝表情），あるいは存在と（表情）知覚，という問題とつながる。現象学の枠組に納まらないこの問題を，やがてメルロ＝ポンティは存在論として，「見えるものle visible」「見えないものl'invisible」そして「見るものle voyant」という用語を使って考えることになる。

3．表情知覚と中動態

カッシーラにおいてシンボル機能は，意識の機能，精神の機能である。Ausdruck 機能も例外ではなく，そのはたらきの主語は意識であり精神のはずである。しかしカッシーラは，意識や精神を ausdrucken という動詞の主語にはしない。そもそも動詞としての ausdrucken という語は，たとえ物や感覚的なものを主語にしてさえ使われない。Ausdruck は，「世界が純粋な表情現象として現われる sich offenbaren」[41]，「本質が（…）現われのうちに示顕する sich manifestieren」[42]，「現われが（…）与えられ sich geben，（…）われわれに示される sich darstellen」[43]等々と，現われ Ersheinung や現われてくる何かを主語として，再帰動詞で表わされている。Ausdruck は，知覚体験の内側から，現象として記述されるが，体験される限りにおいての Ausdruck は，主語と目的語をとる ausdrucken という他動詞では語られえないもののようである。

メルロ＝ポンティは，『知覚の現象学』の時期には，知覚の主体である現象的身体を je という人称的な主体の成立以前の主体，前人称的な on として，知覚を「on perçoit en moi（私において on が知覚する）」と文章化している[44]。『知覚の現象学』のメルロ＝ポンティには，カッシーラ以上に，（身体という）超越論的主体を世界の構造化の中心，主語におく記述がみられる。そこでは，exprimer という他動詞も，しばしば用いられる。しかし『眼と精神』『見えるものと見えないもの』の後期哲学においては，『知覚の現象学』の主体－客体図式の根本的枠組が批判されるとともに，知覚体験も se faire, se voir, se mettre à voir 等々と，見えてくる何か，現われてくる何かを主語とする代名動詞で表わされるようになる[45]。そこにおいてはじめて，先にのべた réalisation や「真なるものの遡行運動」の含む「二つの契機」の問題が，中心的主題として取り上げられることにもなる。

カッシーラが精神による形態化という枠組みと別に，体験に沿って記述した知覚がドイツ語の再帰動詞で表わされること，メルロ＝ポンティが前期の身体主体中心の構図を批判して記述し直した知覚が，フランス語の代名動詞で表わされたこと――このことをわれわれは，根源的な知覚体験，表情体験が，文法上の態でいえば能動－受動の枠組みではなく，むしろ中動態で表わされる，というかたちで理解したい。再帰動詞や代名動詞は，言語学の教えるところによれば，能動態，受動態に対する中動態の流れをくむものだからである[46]。

バンヴェストは，能動態－中動態の対立を，主語が，動詞の表わす過程に対し外的であるか内的であるかの対立である，と述べている[47]。われわれは以前，バンヴェニストのこのような中動態理解とスーザン・ケマーの各言語にまたがる中動態研究[48]とを重ねあわせ，そこから「主語が主語のところで主語を内に含みながら生じる出来事において，元の状態とは違った状態になる」「主語が出来事の内に巻き込まれてある」と中動態を理解した。中動態は，既存の自己同一的な項を前提する能動－受動，主体－客体の枠組みでは捉えきれない事態を表現するものと考えられる[49]。われわれはここで，根源的な知覚，表情

知覚が，中動態で表わされるということと，1や2でこれまで見てきた表情の特性を，関係づけて論をしめくくりたい。

カッシーラもメルロ＝ポンティも，表情知覚の根源性を主張する。現象学的に記述される知覚体験の内部において，表情は，他の何ものにも還元されず，それ以上遡ることのできない，根源的な体験である。主観的なものも客観的なものも，物も意味も，あらわれも本体も，すべてはそこに源をもつ。あらかじめある何かにもとづく出来事ではなく，生じてくる最初の何かについての体験が，能動－受動のことばではなく，中動態で表わされることには，納得がいく。

他方，カッシーラもメルロ＝ポンティも各々，根源的なものである表情が最初から，感性的なものと意味的なもの，あるいは表現と表現されるものという二つの契機を，たとえ潜在的にであれ，含んで現われるをことを認めている。表情体験は，感性的なものの向こうに意味的なものが，表現の向こうに表現されるものが，差異をはらみながら，ずれながら，同時に生じてくることの体験であるようにも思われる。メルロ＝ポンティの指摘する二つの契機の一筋縄ではいかない相互依存関係からも，表情（＝表現）が，安定した一なるもの，それ自身のうちにやすらぐ十全な始原，とは異なる何かであることがうかがわれる。このことは，中動態の主語で表わされるものが，動詞で表わされる過程に巻き込まれてあり，その中で影響を被って変化していくこと，それ自身からずれていくことと呼応するように思われる。

以上のような或る特殊な「根源性」，表現を表情にまで遡って考えるとき突き当たる「根源性」は，創作にしろ受容にしろ，表現の体験を考える際の重要点の一つとなるであろう。芸術体験を語ることばにしばしば見られる中動態による記述も，これと関係してくるはずだ。表情知覚と中動態との関係は，今後の課題として考えなければならない問題である。

註

1）ツルゲーネフ作　二葉亭四迷訳　『あひびき』　岩波文庫　19頁
2）Ernst Cassirer, *Philosophie der symbolischen Formen III*, (1929), Primus Verlag, Darmstadt, 1997, s. 78
3）同上，s.75－76
4）同上，s.71－73
5）同上，s.80
6）同上，s.86
7）同上，s.88
8）同上，s.86
9）同上，s.86
10）同上，s.109
11）同上，s.109
12）同上，s.80
13）同上，s.109

14) 同上，s.109
15) 同上，s.109
16) 同上，s.110
17) 同上，s.118
18) Maurice Merleau-Ponty, *La Structure du comportement*, Paris, P. U. F., 1942, p.232, *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945, p.74
19) Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, p.491
20) 同上，p.337
21) 同上，p.368
22) 同上，p.246, p.371
23) 同上，p.243
24) 同上，p.366
25) 同上，p.369
26) 同上，p.336
27) 「私の身体は表情＝表現 expression（Ausdruck）現象の場，あるいはむしろその現実態そのものである」（*Phénoménologie de la perception*, p.271），「あらゆる知覚，知覚を前提とするあらゆる行為，要するに人間が身体を使うことすべては，すでに，原初的表現 expression primordiale である」（Merleau-Ponty, *Signes*, Paris, Gallimard, 1969, p.84）などということばは，このような意味で理解することができる。現象的身体が明確に主体とされたことで，expression=Ausdruck は，（自分が）表情を見て取る知覚体験の側からのみならず，他から見て取られる表情を生み出す行為，表現行為の側からも語られるようになるわけだ。
28) *La Structure du comportement*, p.223
29) *Phénoménologie de la perception*, p.193
30) 同上，p.325
31) 同上，p.245
32) 同上，p.247
33) 同上，p.369
34) 同上，p.192－193
35) 同上，p.213
36) 同上，p.193
37) Merleau-Ponty, *Sens et non-sens*, Paris, Nagel, 1948, p.32
38) *Phénoménologie de la perception*, p.451
39) Bergson, *la Pensée et le Mouvant*, 1934, Œvres, P. U. F., p.13－20
40) Merleau-Ponty, *Éloge de la philosophie*, Paris, Gallimard, 1953, p.37
41) Cassirer 前掲書，s.73
42) 同上，s.80
43) 同上，s.108
44) *Phénoménologie de la perception*, p.249
45) 拙論「見えるということ」芸術学芸術史論集第3号　神戸大学文学部芸術学芸術史研究会　1989
46) J. デュボワ他著　ラルース言語学用語辞典　大修館書店　1980
47) Émile Benvenist, «Actif et moyen dans le verbe», 1950, *Ploblèmes de linguistique générale*, Paris, Gallimard, 1966 所収
48) Suzanne Kemmer, *The Middle Voice*, John Benjamins Publishing Co., 1993
49) 拙論「中動態の射程」　倉敷芸術科学大学紀要第4号　1999

About «the Basic» of Expression (Physiognomy) –Perception
——from Cassirer and Merleau–Ponty——

Aki MORITA

Faculty of College of Liberal Arts and Science.
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima–cho, Kurashiki–shi, Okayama 712–8505, Japan

(Received September 30, 1999)

Cassirer and Merleau–Ponty show us that the perception is, in its origin, experience of expression (physiognomy). They insist the perception is not passive reception of sensory stimuli, but active Gestaltung, the first of which we experience as expression (physiognomy). Expression (physiognomy) can be reduced neither to the objective nor to the subjective. It should be considered as basic.

On the other hand, expression (physiognomy) has in itself two moments; the sense is incarnated in the apparence. Basic as it is, expression (physiognomy) does not rest in itself, but always slips off from itself.